



評者

第一生命経済研究所
特別顧問

松元 崇



『残酷な20年後の世界を見据えて働くということ』

岩崎日出俊 著
SBクリエイティブ (14年11月)
1,512円 / 256ページ

2011年にアメリカで出版された『Low You See It』によれば、20年後の世界では、65%の人がいまは存在していない仕事に就くそうである。変化の激しいアメリカならではと思わなくもないが、グローバル化が進む今日では日本だけがその例外というわけにもいくまい。

そうしたなかで、日本の20年後を想像してみると、人口の4割が60歳以上という超高齢化社会になっていることだけは確実である。となると、かりに現在の1000兆円をも超える国の借金の存在を忘れたとしても、若い人が支払う社会保険料や税金は、こうした多数派であるシニアの年金や医療費に消えていくので、勤労世代はいくら働いてもなかなか余裕を感じることができないことになる。そうした将来を見通しながら、若い人に前向きに生きることを大切さを説いているのが本書である。

経済がグローバル化した今日、日本はアジア諸国とも競争していかなければならない。たとえば、12億を超える人たちが切磋琢磨しているインド。そのなかに勝ち抜いてきた人々たちを相手にこれからの日本の若者は競争していくのである。著者によれば、日本だけが平等主義を徹底させて全員がそこそこのいい暮らしができる

るといふ時代はとうの昔に過ぎ去っている。いまの職場が満足いくものだとしても、皆がそれに安住していると、これから先、日本全体が「ゆでガエル」になってしまう(カエルを熱湯に入れると、飛び上がって逃げ出すが、ぬるま湯から少しづつ熱すると茹で上がってしまう)のである。

本書は、これから就職する、あるいは転職を考えている若者向けに書かれており、「流暢でなくていいから英語を身につける」「常にポジティブに考える」「謙虚さを忘れない」「ちよつとした苦しみに耐える」といったアドバイスを中心になっている。だが、本書が若者向けだけかといえは、そうではない。日本人は決断を先送りしがちだが、それは、いまは決めないという「重大な決断を下している」ということだとの指摘などは、経営者にとっても耳が痛いだろう。

最近、東大法学部出身者で、司法試験に受かって裁判官や弁護士にならずに起業する人が出てきているといった指摘は、企業の管理職の地位にある読者に、そういう志向の若者が部下になる可能性を認識させてくれる。また、政策当局者には、時給900〜1000円で派遣される50代独身女性の話や、大企業に入ってもリストラされる人の話が、そういった人々の能力を発揮させるために新たな仕組みが必要だという政策課題を認識させてくれるだろう。

本書の著者は、日本興業銀行に22年勤めた後、45歳で外資系投資銀行に移り、メリルリンチやリーマン・ブラザーズなどで企業合併や買収などの業務に携わってきた。現在は、自らの会社で経営コンサルタントやベンチャー投資を行っている。筆者も、かつて著者と同じアメリカのビジネススクールに通っていた経験をもっている。当時アジア人といえは日本人だったが、いまや中国人やインド人が中心になっている。本書のご一読をぜひお勧めしたい。